



夏目踊りの収録風景 (2011年8月、徳之島町井之川)。

本稿では、国立民族学博物館（民博）が進めているフォーラム型情報ミュージアム構築のプロジェクトのうち、「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」（2014～2015年度）について報告する。このプロジェクトは、私たちがここ5年の間に作成した徳之島の民俗芸能の映像記録をウェブ上で公開し、それを核として関係者ならびに研究者がもつ知識や資料の集積を進め、徳之島の民俗芸能に関する知見を深めること、そして、このシステムを地元の関係者が気軽に利用できるようにして、民俗芸能の伝承に役立てることを目的としている。

フォーラム型情報ミュージアム

民博は、グローバル化が広く深く進行した20世紀後半、世界に類例のない規模で同時代の民族誌的資料を収集した。それらは、世界の諸民族の社会と文化を表象する資料として位置づけられた。民博が創設されてから40年が経過したが、その間の世界の社会や文化の変化は著しく、収集時には同時代の資料であったものも、すでに使われなくなったり、作られなくなったりしたものが増えている。それゆえ、もともとそれらを使っていた人々にとって、民博がもつ多くの資料は、まだ鮮明な記憶をともない、郷愁や喪失感など強い情動を引き起こす喚起力をもっている。

一方、地域や国を超えて人やモノが移動する現代社会において、自身のルーツとしての民族的な伝統に対する意識を強くもつ人々が増え、文化的多様性を維持し、伝統に根ざしつつ新しい文化を創造することに重きがおかれるようになっている。フォーラム型情報ミュージアムは、インターネット上で民博が所蔵する資料の情報を公開し、世界各地に広がる関連資料への窓となり、関係者がさまざまな資料や知見をもち寄り、情報と意見を交換する場を提供し、世界の多様な文化に関する知識を蓄積しようとするものである。研究機関がもつ資料を、もともとそれらを使っていた社会を含む多様な場

において、再び文化的意味をもつものとして機能させるためのシステムだと言うこともできるだろう。

徳之島の芸能に関するプロジェクトでは、島内の徳之島町、伊仙町、天城町の関係施設にフォーラム型情報ミュージアムの端末を設置し、島の人々に利用してもらうことを最初の目標としている。そして映像に記録されたそれぞれのジャンルや曲目について、コメントの書き込みを通じて意見や情報を交換し、芸能にかかわる知識や体験など、何もしなければ忘れ去られてしまうような民族誌的情報を蓄積する。さらに関連する録音や録画資料があれば、それらもコメントとともに残していこうとしている。民博が記録した映像を呼び水として、それを見た人々から新たな情報や資料を提供してもらい、徳之島の芸能に関する情報や資料を集積していくシステムとして活用していきたいと考えている。

収録コンテンツ

徳之島は、奄美群島南西に位置する面積約250平方キロメートル、人口約2万5千の島であり、3町からなる。豊かな歌や芸能を誇るが、高等教育や就職の機会を求めて多くの若い人々が島外へ移り住まざるをえない中、島内各地の芸能が伝承の危機に直面している。

このプロジェクトの核となるコンテンツは、2010年以来、民博の文化資源プロジェクトや人間文化研究機構の連携研究により作成を続けてきた徳之島の民俗芸能と民謡の映像記録である。5年間で、26集落ののべ250曲程度の踊りや歌を収録した。その大きな部分を占めるのは、それぞれの集落で農耕儀礼、人生儀礼、年中行事にともない歌い踊られてきた芸能である。それらに加えて、三味線の伴奏によるシマウタも含まれている。

徳之島の芸能の映像記録作成を始めた直接のきっかけは、笹原亮二（民博）監修の映像『奄美大島の八月踊り』（民博製作、2007年）の上映会だった。私たちは、芸能の映像記録が



映像の上映会 (2011年8月、徳之島町山)。

芸能の上演や伝承にどのように資することができるかを考えるため、奄美大島や周辺の島々で上映会を開催した。徳之島においても2009年に上映会を開催したところ、ぜひ島の映像記録を作成して欲しいという強い要望があり、着手することになったのである。

私たちは、収録と並行して、頻りに小規模な上映会も開いた。その過程で、それぞれの歌や踊りの映像を自由に選択して視聴できるようなプログラムを作成し、それをタブレット端末で見ってもらうことも試みた。撮影するたびに、関係する集落にはDVDを渡したが、DVDは再生機器がなければ、その場で見ることはできない。タブレットに映像が入っていれば、その場ですぐに一緒に映像を見ることができる。するとその場でいろいろな情報や意見を聞くことができ、次の撮影の計画を相談することも容易だった。当時のタブレットは、機器の維持管理や記憶容量、操作性に若干難があり、最善という訳にはいかなかったが、手軽にその場で一緒に映像を見られることは大きな利点であることがわかった。

発見の場としての映像

島における上映会では、特定の人映ると笑いが起きたり、感心したり、いつ撮影されたものかをしゃべりあったりする光景がよく見られた。芸能を支えるコミュニティは不動のものではなく、年々、地域社会や構成員の変化にともない、人間関係も変わっていく。芸能を記録した映像は、コミュニティの人々にとっては、こうした社会の変化を反映しており、毎回の上演の微妙な違いからさまざまなことを読み取ることができる。

私たちのように外から島を訪問する者にとって、映像を見てそれらをすぐに理解することは難しい。しかし、地元の人々と一緒に映像を見ながら対話を重ねることにより、その一端が明らかになってくることもある。地元の人々の話は、しばしばその映像には直接映っていないこととも関連しており、そこから私たちは、芸能の背景に広がる事柄らについて理解を深め、演技とともに起こっている社会的過程についても知ることができるのである。

一方、私たちの質問に答えるために、地元の人々が考え込んでしまうこともある。その質問が予期しないものであり、そうした角度から芸能について考えたことがなかったために、改めて振り返る必要が出てくるためである。地元の人々が、そこに映っていないものを映像から読み取るように、外部の人間も、そこに映っていないさまざまな知識や関心を背景に映像を見ているのだと言えるだろう。

このように考えると、映像は、立場の異なる人々の知見を引き出すことのできる、一種の発見の場ともなりうるということがわかる。フォーラム型情報ミュージアムが目指すのは、まさにこうした知見の交換により、資料についての理解を深めていくことだと言えるだろう。

今後の課題

島でのフォーラム型情報ミュージアムの端末の設置については少しずつ見通しがついてきた。今後は実際のシステムの運用の方法について考えていく必要がある。

フォーラム型情報ミュージアムは、利用者によるコメントの書き込みを通じた意見や情報の交換により、資料に新たな

意味を付与していくところに最大の特徴がある。そのため、実際に利用してもらえなければその良さを発揮することができない。運用においては、端末を設置しただけでは、私たちが想定するような使い方を促進することはできないだろう。ワークショップを開催し、システムの使い方や可能性を体験してもらおうとともに、日々の運用において人々の参加を促すファシリテーターの養成が求められる。

現在、出てきているアイデアの1つは、学校における郷土文化の学習に、このシステムを活用することである。私たちが作成した映像記録は、ある地区の小学校の運動会における地元芸能の演技のために活用されたこともある。島内の学校では、地元の芸能を教えることが多い。そうした学習において、芸能を演じる参考にしたたり、異なる集落の芸能と比較するためにシステムを活用してもらおうことができるだろう。さらに、子どもたちが家族や集落の年長者に芸能について話を聞き、その結果をコメント機能により書き込むこともできる。書き込みを重ね、情報量が増えていく様子を実際に島の



天城町ユイの館における映像コンテンツの公開端末（2015年2月）。

人々に見てもらえば、このシステムの可能性を認識してもらえるのではないかとと思われる。そして自分たちもさまざまなことを思い出し、このシステムに書き込みを行うという連鎖反応に期待したい。また、インターネットやパソコンの利用に慣れた若い人々にもこのシステムを体験してもらい機会を作り、島の芸能についての情報やコメントのやり取りに参加し、島の文化への関心を深めて欲しいと考えている。

フォーラム型情報ミュージアムは、研究機関や博物館にアーカイブされた資料や情報を活用して新たな情報を生み出し、文化的な創造活動を促進しようとするシステムである。民博がもつ徳之島の芸能の映像記録を、このシステムを通じて島の多くの人々に活用してもらい、研究資料を現地の文化伝承活動においても意義をもつものとして位置づけていく努力と工夫を重ねていきたい。

ふくおかしょうた

国立民族学博物館文化資源研究センター准教授。専門は民族音楽学。インドネシア、西ジャワの伝統芸能について現地調査に基づく研究を行ってきた。芸能の伝承において映像記録が果たす役割にも関心をもっている。共著に『インドネシア芸能への招待—音楽・舞踊・演劇の世界』（2010年東京堂出版）など。